

Pumpkin(パンプキン) 7月号

「ドン・キホーテの舞台を訪ねて」

Que toda afectacion es mala.

(気取るのは何にかぎらずよろしくないからな)



パンプキン原稿

リード

世界で最も夢を抱いていたのは誰だろうか？歴史上あまりにも多様な人物がいて、人それぞれによって見方も異なるので一概には言えない。でも、文学の世界でこの人物に異論を唱える人は少ないだろう。

「ラ・マンチャの男」ドン・キホーテ。“見果てぬ夢”を追って正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ、愛馬ロシナンテに乗り、風車に向かって突進する。従者サンチョ・パンサが物質主義の権化とも言われるのに対し、思い姫ドルシネアを胸にどこまでも夢を追って進むドン・キホーテは理想主義の典型とも解釈されている。初版本の出版から昨年でちょうど 400 年。物語の舞台を訪ねてみた。

本文

マドリードから南に列車またはバスで 2 時間。赤茶けたラ・マンチャの大平原はまさにスペインの色そのものである。カンポ・デ・クリプターナの丘には 10 基の風車が点在している。かつては粉挽きに活用していたものだが、現在は観光用と化し回っていない。

ドン・キホーテはこの風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ。従者サンチョ・パンサの止めるのも聞かずに、乗っているロシナンテに拍車をくれ、一番手前の風車に突いてかかった。すると、槍先がはねぎに触れると見えたとき、にわかに吹き起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れ、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぼんと捨てられ、野原を転がっていった——物語の全部を知らない人でもここだけは知っている。有名なシーンである。

風車の一つが観光案内所になっていた。受付の女性が言った。「そう、日本からのお客さんが圧倒的に多いわね。シーズンには 1 日に 4 台の大型バスがやってくる。次はフランス、そしてドイツかしら」。訪問ノートにはぎっしりと日本人の署名もあった。

猪突（ちょとつ）猛進のドン・キホーテと優柔不断なハムレット。これにゲーテのファーストを加えて、西欧文学の三大主人公と呼ぶ人もいる。セルバンテスが没したのはくしくも「ハムレット」の作者シェークスピアと同じ 1616 年だった。昨年は「ドン・キホーテ」の出版からちょうど 400 周年。セルバンテスの生地アルカラ・デ・エナーレスを初め、作品に関係あるスペイン各地で記念の行事が行われた。

マドリードのスペイン広場には 300 周年の際に作られた、ロシナンテに乗ったドン・キホーテと、ロバにまたがったサンチョ・パンサの像がある。その後方の高い台座には、作者セルバンテスが小説の主人公の二人を見守るように座っている。

「人間寝てえるうちは、身分の高め者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」「この世を捨て、地の下にもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはないわねえ」(永田寛定訳：岩波文庫)——サンチョ・パンサの言葉である。二人

の間で交わされるやりとりは実に示唆に富んでいる。

作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されている。ドルシネア姫がいたというトボソ村には「ドン・キホーテ図書館」があり、54カ国語の本が陳列されていた。

旅行者の多さに見る日本人の「ドン・キホーテ」への関心の高さ。それは滑稽な冒険譚もさることながら、未来に夢を描くことが難しい現代の日本社会にあって、狂気といわれながらも理想に向かって進む主人公のどこかに惹かれるものがあるからではないか。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——セルバンテス(ミュージカル「ラ・マンチャの男」＝森岩雄・高田蓉子訳＝より)。

そしてドン・キホーテは言う。「気取るのは何にかぎらずよろしくないからな」(永田寛定訳:岩波文庫)。気取らないこと。見栄や格好でなく、ありのままの自分で振舞っていくこと。見栄や虚栄にとらわれ、慣れてしまうと自身だけでなく、周りの環境をも蝕んでいく。『ドン・キホーテ』の有名な一説に「忘恩は、慢心の落とし子である」とあるとおりである。

人に尽くし、世界平和という遠大な理想を掲げ、あるべき姿のために進む人生——これこそ最高の夢でありロマンである。セルバンテスは、そう語りかけているのではないだろうか。